



館長だより

チーム

「TEAM は略語である」という俗説は有名ですが、英語圏ではしばしば、TEAM を「Together 一緒に」、「Everyone みんな」、「Achieves 達成する」、「More もっと」の略だと説明する人がいます。日本でも「チームワーク研修」などでよく紹介されるフレーズですが、実は、語源的な流れからすると事実ではないようなのです。言わば後世の教育的スローガンと言った方が良いのかもしれません。実際には、古英語にまでさかのぼる非常に古い語で、語源的には「引っ張るもの」「結びついたもの」「家族・血統」を意味していました。以下では、この語がどのように生まれ、どのように現代の「チーム」という意味に変化していったのかを、まとめてみることにしましょう。

1、TEAM の本当の起源

「team」という語は、現代ではスポーツやビジネスの文脈で「仲間」「組織」「共同体」を指す言葉として定着しています。しかし、その歴史をたどると、まったく違う世界が見えてきます。語源学的に「team」の根は、印欧祖語の *deuk-*（引っ張る、導く）にあり、ここからゲルマン祖語 *taumaz*（引っ張るもの、結びついたもの）が生まれ、さらに古英語の *team*（子孫、家族、血統、家系）へとつながってきたようなのです。つまり、最初の「team」は「家族」や「血統」を表す語だったのですが、「引っ張る」というイメージから、後に「馬や牛など、荷車を引くために一緒に繋がれた動物の組」へと意味が広がっていきました。ここで初めて、現代の「チーム」に近い「共同で働く一組」というニュアンスが生まれました。



山形県産業科学館

令和8年1月22日(木)

発行 館長 加藤智一

2、馬や牛の「一組」から人間の「チーム」へ

中世のイングランドでは、農耕や運搬において、複数の動物と一緒に繋いで荷車を引かせることが一般的でした。この「一緒に引く」動作が、語源の「引っ張る」と見事に重なっていきます。古英語では、「team」は「子孫」「家系」といった意味と並んで、「一緒に働く動物の組」を指す語としても使われていました。そして中世に入ると、法律用語として「共同で訴訟を起こす人々の集団」という意味でも使われるようになります。このように、「team」はもともと「血縁で結ばれた集団」から「物理的に結ばれた動物の組」へ、さらに「目的のために結ばれた人間の集団」へと意味を広げていったようです。

3、現代的な「チーム」の誕生

現代の「スポーツチーム」「作業チーム」という意味が確立するのは16世紀以降とされています。特に「試合の一方の側」という意味が登場するのは19世紀半ば、クリケットの文脈からでした。つまり、私たちが日常的に使う「チーム」という概念は、意外にも比較的新しいものなのです。

液化バイオメタン (LBM)

液化バイオメタン (LBM) は、家畜ふん尿などのバイオマスから得られるメタンを精製・液化した「カーボンニュートラルな液体メタン」で、近年は小形ロケット燃料として実用化が進んでいます。特に北海道のインターチェンジ (IST) がロケット「ZERO」で採用し、燃焼試験にも成功したことで注目が高まっています。

家畜ふん尿などから発生するバイオガス（主成分はメタン）は、液化天然ガス (LNG) とほぼ同等の燃焼特性を持ち、燃焼時に CO₂ は排出しますが、原料が生物由来のため、カーボンニュートラルと評価され、近年、SpaceX「スターシップ」など世界的に採用が増加しており、ロケット燃料として注目されています。液化メタン燃料の利点としては、高い比推力と液化水素より沸点・融点・引火点などの温度が高く扱いやすい点、そして燃料タンクの小型化が可能であり、再使用ロケットとの相性が良いことなどがあげられます。北海道十勝では、帯広市に国内初の LBM 製造工場が稼働しており、地域の家畜ふん尿 → バイオガス → LBM → ロケット燃料という地産地消のサプライチェーンが構築されつつあります。